

恋愛進展崩壊フェイズ尺度の開発とデートバイオレンスとの関連：改訂版デートバイオレンス・ハラスメント尺度の作成と分析（6）

著者	越智 啓太
出版者	法政大学文学部
雑誌名	法政大学文学部紀要
巻	80
ページ	97-112
発行年	2020-03-13
URL	http://doi.org/10.15002/00023067

恋愛進展崩壊フェイズ尺度の開発と デートバイオレンスとの関連

——改訂版デートバイオレンス・ハラスメント尺度の作成と分析 (6)——

越 智 啓 太

要 約

本研究では、恋愛の進展・崩壊のプロセスとデートバイオレンス、ハラスメントの関連について明らかにする。まず、恋愛の進展と崩壊について、カップルが現在どのような交際フェイズにいるのかについて査定する程度の信頼性と妥当性を持つ尺度を構成した。つぎにこの尺度とデートバイオレンス・ハラスメント尺度の相関を算出した。その結果、デートバイオレンス・ハラスメントは恋愛進展フェイズでは、あまり発生せず、崩壊フェイズにおいて発生することが示された。

キーワード：恋愛関係、愛、恋愛崩壊、恋愛進展、デートハラスメント

1. 問 題

恋愛の進展とデートバイオレンス・ハラスメント

デートバイオレンスは、交際中のカップル間における身体的な暴力や間接的な暴力、性的な暴力をさす概念である。また、近年ではこのような狭義のバイオレンスだけでなく、交際相手に対する行動監視や支配、言語的な暴力、ストーキングなどの各種ハラスメント行為についても問題にされるようになっている（越智・喜入・甲斐・佐山・長沼, 2015）。さて、デートバイオレンスについては近年、国内外で多くの研究が行われ（赤澤, 2006; Jennings, Okeem, Piquero, Sellers, Theobald, & Farrington, 2017）、その実態については多くのことがわかってきているが、基本的な問題でまだ十分明らかになっていないものも少なくない。

そのひとつとして、交際の進展とデートバイオ

レンス・ハラスメントの関連がある。これは、デートバイオレンス・ハラスメントは交際が進展してから次第に発生するようになってくるのか、それとも交際初期に多く発生し次第に減少していくものなのか、あるいは交際初期からあまりかわらない頻度、強度で行われるものなのか、という問題である。もちろん、これはケースやバイオレンス・ハラスメントの種類によって異なっている可能性もあるが、その場合には、どのようなケースでどのような形態をとりがちなのかということを検討していく必要がある。

恋愛の進展を測定する尺度に関する研究

この比較的単純な問題がなかなか明らかにならない理由の一つは、そもそも恋愛の進展を測定するための標準的な手法が存在しないからだと思われる。恋愛の進展尺度として考えられるものとして、まず考えられるのは交際期間などの時間的な指標であるが、実際の恋愛行動をみてみると、短

期間でより深い関係になるカップルから、非常に長期間をかけて進展していくカップルまで個人差が大きく、これを恋愛進展の尺度とするのは問題があるように思われる。

次に、カップル間の行動指標、具体的には「キスをする」などの性的な行動や「日帰りの旅行に行く」といったデート行動、「恋人として友人に紹介する」という対人行動などを指標にするという方法がある。この方法で恋愛進展の程度を測定する尺度として開発されたものとして、松井(1993)のものがあげられる。

行動指標はとくに恋愛の進展フェイズを把握するためには有用な手がかりである。しかしながら、恋愛は折り返し地点を迎え崩壊に至っていくことも少なくなく(むしろそのようなケースが多く)、その崩壊のフェイズを把握するという目的のためには行動指標は必ずしも有効な尺度とされない可能性がある。恋愛の崩壊プロセスは顕在的な行動によって規定されているわけではなく、実際相手に対する感情や思考などの内面的なものによって規定されていると思われるからである。たとえば、「ふたりで泊まりがけの旅行に行く」としても心は離れてしまっているということは容易に想像できる。

そこで、本研究では、まず、内心的な関係性に基づいた関係進展、そして崩壊の段階を測定する尺度を構成し、それをもとにデートバイオレンス・ハラスメントとの関連について検討しようと思う。

恋愛進展崩壊モデルについての先行研究

恋愛の発生から崩壊のプロセスについておもに内心的な関係に焦点を当てて包括的にモデル化したものとして、Levinger (1980) のABCDEモデルがある。これは、恋愛の進展のフェイズを関係の初期で相手に対して魅力を感じる時期であるA (attraction)、自己開示などを通じて関係性を深めていく時期であるB (building)、お互いの存在を認め合い、一緒に居ることが普通となるC (continuation)、いくつかの関係が悪化しはじめるD (decline, deterioration)、関係の悪化によっ

て関係自体が解消するE (ending) という5つのフェイズに分けるものである。ただし、彼の理論では、現在カップルがどの段階にいるのかを測定するためのツールなどは提供されていなかった。

また、とくに恋愛崩壊に焦点を当てて関係性をモデル化した理論として、Duck (1982) や Vangelisti (2006) のものがある。これは、ふたりが恋愛関係を築いているところからスタートし、二人の間に問題があることを認識し、それを内的に解決しようと試み(内的取り組み段階)、それが限界に達すると直接話し合って問題を解決しようと試み(関係調整段階)、つぎに社会的ネットワークに助けや助言を求め、それがうまくいかない場合に関係を終結する決心をするという流れになっている。

彼らの理論は、内心に焦点を当てて関係の崩壊プロセスを明確に映し出しているという点で非常に有効なモデルであると思われる。とくに関係の崩壊が相互の問題点とその調整という観点から整理できるということを示したという点は卓見であろう。しかしながら、彼らも現在のカップルがどのようなフェイズにいるのかについて測定する尺度を作成しているわけではない。

そこで、本研究では Duck と Vangelosti の理論を元にして、お互いの欠点についての認知やその解決に焦点を当てた恋愛進展のモデルを構築し、それに対応する尺度を構成することにする。

恋愛進展崩壊についての4フェイズモデル

本研究で作成する恋愛進展崩壊のモデルは、Duck と Vangelosti の理論を恋愛進展のフェイズにも応用したものである。恋愛進展は基本的には赤の他人が接近し、親密な人間関係を築いていくものであるため、その過程では意見や態度の相違やぶつかり合いが生じたり、相手の欠点が気になったりすることは避けられないと思われる。このような食い違いに対する解決方法が恋愛の進展や崩壊に伴ってシステムティックに変化していくのではないかというのが根本的な発想である。そして、本研究ではこれを4つのフェイズに分けて

考えようと思う。つまり、以下のようなモデルである。

1) 第1フェイズ：あばたもえくぼ段階

この段階では、意見や態度の相違、相手の欠点が見えない、あるいはほとんど問題にならないため、そもそも問題を認知できないあるいは、解決しようと試みない段階である。

2) 第2フェイズ：内的取り組み段階

この段階では、意見や態度の相違、相手の欠点などを認知するが、それについて「許してあげ」たり、人には誰でも欠点があるからなどと個人内で合理化することによって問題を解決しようとする段階である。相手に直接クレームをつけるのではなく、自分の認知を変容することで問題を解決しようとする段階である。

3) 第3フェイズ：相互調整段階

この段階では、意見や態度の相違、相手の欠点などについて、自分の内部で解決するのではなく、直接相手にクレームをつけて話し合いなどによって解決しようとする段階である。

4) 第4フェイズ：えくぼもあばた段階

この段階では、いままであまり目につかなかった、意見や態度の相違や相手の欠点がよく目につくようになり、かつ、これらの問題を積極的に解決しようとする行動がとられない。この段階になると恋愛関係は崩壊に近づいていく。

本研究では、まず、上記の恋愛進展崩壊の4フェイズモデルについての尺度を作成しようと思う。実際には、それぞれのフェイズとの適合性を測定する四種類の尺度を測定し、つぎにそのスコアから、カップルが現在どのフェイズにいるのかを明らかにする方法を考案したいと思う。

2. 【研究1】恋愛進展崩壊フェイズ尺度の作成に関する研究

目 的

研究1では、カップルが恋愛進展崩壊の4段階

のうちのどの段階にいるのかを測定するための尺度を作成することを目的とする。4段階のそれぞれについて、それらの段階での特徴的な認知・行動を測定する3項目ずつの尺度を作成した。フェイズ1尺度は、「相手のすべてが気に入っていて欠点は見えない」など3項目、フェイズ2尺度は、「相手には欠点もあるが、他にもいい点がたくさんあるので許してあげる」など3項目、フェイズ3尺度は、「つきあいを続けていくためには相手の欠点を何とかしてもらいたい」など3項目、フェイズ4尺度は「昔は相手の欠点と思わなかったことが、いまでは欠点だと思うようになった」などの3項目、尺度全体では12項目からなる。全ての項目は、Table 1 及び APPENDIX に示してある。

方 法

研究参加者：異性と交際中である大学生男女71名（男性15名、女性56名）。

手続き：調査の目的や実験参加が任意であることなどを説明した後、質問紙法で、恋愛進展崩壊尺度を行った。まず、異性と交際中であるかについて質問し、交際中でないものについてはフェイスシートのみで回答を終了させた。恋愛進展崩壊尺度については、現在の二者関係について各項目を読み、「非常によく当てはまる(7)」～「どちらでもない(4)」～「まったく当てはまらない(1)」の7件法で回答させるものである。また、恋愛進展崩壊尺度を行った参加者については、引き続き恋愛進展崩壊尺度の妥当性を検討するためにスタンバークの恋愛の三角理論に基づく恋愛尺度の日本語短縮版（越智，2015）を行った。この尺度は、恋愛を「親密」、「情熱」、「コミットメント」の3つの因子によって測定するものである。この尺度についても、それぞれの項目について恋愛進展崩壊尺度と同様な7段階で回答させた。回答所要時間は約5分間であった。

結 果

(1) 恋愛進展崩壊尺度の作成

まずフェイズ1～4を構成する全12項目について

Table 1 恋愛進展崩壊尺度の因子分析結果と因子間相関【研究1】

フェイズ			1	2	3
1	1	相手のすべてがいておしくて欠点は見えない	-0.061	0.285	0.391
	2	相手の欠点もチャームポイントの一つであり愛おしい	-0.089	0.319	0.510
	3	相手には欠点もあるが、そんな欠点は全く問題ではない	0.075	0.095	0.854
2	1	相手には欠点もあるが、他にもいい点がたくさんあるので許してあげる	-0.034	0.776	0.104
	2	相手の欠点が目につくことがあるが、許してあげなくちゃと思う	0.132	0.564	0.070
	3	相手には欠点があるが人間誰にでも欠点があるので、それはしょうがない	-0.124	0.423	0.293
3	1	つきあいを続けていくためには相手の欠点を何とかしてもらいたい	0.497	0.111	-0.295
	2	相手の欠点が目についてイライラさせられることが多い	0.574	0.105	-0.401
	3	相手の欠点についてどうにかしろと注文をつけることが多い	0.706	0.160	-0.208
4	1	昔は相手の欠点と思わなかったことが、いまでは欠点だと思うようになった。	0.784	0.079	0.062
	2	相手のちょっとしたしぐさや行動にイライラすることがある	0.782	-0.060	0.110
	3	普通なら欠点と思えないことまで、相手の欠点に思えてしまうことがある。	0.758	-0.304	0.284
因子間相関			1	-0.244	-0.446
			2		0.317
			3		

て、重みづけのない最小二乗法で、因子分析を行い、プロマックス回転を行った。固有値1.0の基準で3つの因子が抽出された。パターン行列と因子間相関行列をTable 1に示す。フェイズ1とフェイズ2は比較的明確な因子を形成したが、フェイズ3とフェイズ4は同一の因子となり、分離しなかった。

各フェイズ尺度ごとの基本統計量、各フェイズについての尺度の信頼性を α 係数で示したものをTable 2にあげる。 α 係数については、全体的に値は低めではあるが、この尺度は3項目という少数項目からなっているために許容できる範囲であると考えた。また、性差について、各フェイズ尺度ごとに平均値を算出した。その結果、フェイズ

1尺度では男性13.60、女性12.23、フェイズ2尺度では男性15.87、女性16.05、フェイズ3尺度では男性8.87、女性11.07、フェイズ4尺度では男性7.93、女性8.50となった。それぞれt検定を行ったところ、フェイズ3尺度で $p=.055$ となったが、すべての尺度において、性差は見られなかった。

(2) 恋愛進展崩壊尺度とスタンバーク尺度との相関

次に、恋愛崩壊フェイズ尺度とスタンバーク恋愛尺度の各因子について、ピアソンの相関係数を算出した。結果をTable 3に示す。まず、各フェイズ尺度ごとの相関であるが、フェイズ1尺度、フェイズ2尺度の間と、フェイズ3、フェイズ4

Table 2 各フェイズ尺度ごとの平均、標準偏差、 α 係数

	平均値	標準偏差	α 係数
フェイズ1	12.52	3.63	0.747
フェイズ2	16.01	2.93	0.676
フェイズ3	10.61	3.80	0.812
フェイズ4	8.38	4.13	0.797

Table 3 各フェイズ尺度の得点とスタンバーグ尺度の相関

	フェイズ1	フェイズ2	フェイズ3	フェイズ4	親密性	情熱性	コミットメント
フェイズ1	1	.474**	-.407**	-.263*	.433**	.279*	.197
フェイズ2		1	-.235*	-.223	.142	.430**	.301*
フェイズ3			1	.626**	-.119	.062	-.065
フェイズ4				1	-.221	-.080	-.175
親密性					1	.249*	.445**
情熱性						1	.672**
コミットメント							1

尺度の間にはそれぞれ高い相関が見られた。また、フェイズ1, 2尺度とフェイズ3, 4尺度の間には負の相関が見られた。とくにフェイズ3尺度は、フェイズ1, 2尺度と有意な負の相関が見られた。これはフェイズ1, 2が恋愛進展過程、フェイズ3, 4が恋愛崩壊過程を測定しているからだと思われる。

スタンバーグ尺度との関連においては、フェイズ1尺度は、親密性と有意な相関が、フェイズ2は情熱性とコミットメントと有意な相関が見られたが、フェイズ3, 4は親密性、情熱性、コミットメントのいずれとも有意な相関は見られなかった。この結果は、スタンバーグの尺度は基本的に恋愛進展と関連していると思われること、恋愛のごく初期には親密性、恋愛進展期には情熱とコミットメントが生じやすいということから考えれば、フェイズ1, 2尺度の外的基準妥当性を示すものであるといえるであろう。

(3) 素点を元にしたフェイズのカテゴリー分類とスタンバーグ尺度との関連

本尺度のオリジナルな部分は、それぞれの尺度得点を比較し、現在のカップルがどのフェイズにいるのかを判断するという部分にある。そこで、各参加者の恋愛をフェイズ分けする採点を行っ

た。参加者ごとに第1～第4フェイズ尺度の得点(素点)が最も高いものを選び、それをそれぞれの参加者のカテゴリーとした。なお、複数のカテゴリー得点と同じ場合には、よりフェイズ数の大きなものを選択した。これは、本尺度の基本的な仮定として、フェイズが小さい方から大きい方に移行していくものと考えたからである。その結果、フェイズ1は6名(8.4%)、フェイズ2は52名(73.2%)、フェイズ3は9名(12.7%)、フェイズ4(5.6%)は4名となった。

それぞれのフェイズごとにスタンバーグ尺度の平均値を算出したものをTable 4にあげた。数値的には、親密性については、フェイズが進行するごとにその値が低下し、また、情熱性、コミットメントについてはフェイズ2をピークとしてその後、フェイズ進行とともに値が低下するという傾向が見られたものの、分散分析の結果、親密性[F(3,67)=1.276, *n.s.*]、情熱性[F(3,67)=0.747, *n.s.*]、コミットメント[F(3,67)=2.044, *n.s.*]のいずれでも有意な差は検出されなかった。

考 察

本研究では、二者の欠点に関する受容と反発を指標として恋愛のフェイズを測定する尺度作成を

Table 4 恋愛進展崩壊フェイズごとのスタンバーグ尺度の得点

	フェイズ1	フェイズ2	フェイズ3	フェイズ4
親密性	8.50	7.50	7.11	6.00
情熱性	4.50	5.67	5.00	4.50
コミットメント	6.00	6.44	6.33	3.50

試みた。その結果、 α 係数で測定した信頼性はほどほどに高い4つの尺度が構成された。ただし、フェイズ3尺度とフェイズ4尺度は相関が高く因子としては分離しなかった。フェイズ1はスタンバーク尺度の親密性、フェイズ2尺度は情熱とコミットメントと相関を持っていたことも含めて考えれば、本研究の結果は、[恋愛初期を測定するフェイズ1尺度]→[恋愛の進展を測定するフェイズ2尺度]→[恋愛の崩壊過程を測定するフェイズ3, 4尺度]ということになるのかもしれない。

各尺度の素点をもとに参加者の現在の恋愛進展崩壊フェイズを測定する部分であるが、実際には、フェイズ2の平均点が、ほかのフェイズの得点よりも高く、その結果としてフェイズ2に振り分けられる参加者が全体の3/4にも達してしまった。この部分に関しては、現在、交際中のカップルを対象にする以上、当たり前の結果かも知れないが、フェイズ分けにおいて人数が著しく偏ったため、スタンバークの尺度との関係もあまりはつきりとしないうちになってしまった可能性がある。この点、フェイズ分けの際に素点でなく、標準得点を使用するなどの工夫をすれば、結果が若干改善する可能性がある。ただ、いずれにしろ【研究1】は調査協力者の数も多くなかったことや、大学生に限られていたことから分析には一定の限界があると思われる。そこで、より多くの調査協力者を対象にした調査を【研究2】以降で行うことにする。

3. 【研究2】恋愛進展崩壊フェイズ尺度の特性に関する研究

目 的

【研究1】では、恋愛進展崩壊フェイズに関する尺度が構成された。しかし、【研究1】では調査参加者が少なく、また、調査対象者も大学生に限られていた。そこで、研究2では、より多くの参加者を対象として恋愛進展崩壊フェイズ尺度を実施し、その特性について明らかにしようと思う。

方 法

研究参加者：異性と交際中である18歳から39歳の男女1,000名（男性500名、女性500名）

手続き：調査対象者は、あらかじめ調査会社のデータベースに登録していたものから条件（年齢、現在異性と交際中）にあうものを抽出した。あらかじめ、調査内容等について説明し、承諾が得られたものについてのみ調査が行われた。なお、この調査に最後まで参加した場合には商品などと交換ができる一定のポイントが協力者に与えられた。調査は、ウェブを通して行われた。実施した尺度は、恋愛進展崩壊尺度と恋愛・友情尺度（越智, 2015）、デートバイオレンス・ハラスメント尺度（【研究3】で詳述）および二者間の関係についてのいくつかの質問である。恋愛進展崩壊尺度については、現在の二者関係について各項目を読み、「非常によく当てはまる（7）」～「どちらでもない（4）」～「まったくあてはまらない（1）」の7件法で回答させるものである。恋愛・友情尺度は、Rubin（1970）のLove-Like尺度を元にして、越智（2015）が再構成した愛情、友情、尊敬尺度のうち、前2者の尺度である。

結 果

（1）恋愛進展崩壊尺度の作成

重みづけのない最小二乗法で因子分析を行った結果、固有値1.0の基準で3つの因子が抽出された。プロマックス回転後のパターン行列と因子間相関をTable 5に示す。第1因子は、フェイズ3, 4の項目が含まれ、第2因子はフェイズ1, 2の項目のうち、1番目の項目をのぞく5項目が含まれた。第3因子は、フェイズ1の第1因子のみが含まれた。全体的に、フェイズ1とフェイズ2, フェイズ3とフェイズ4が同じ因子として分類される傾向があった。各フェイズ尺度ごとの平均点と標準偏差、 α 係数をTable 6に示す。

Table 5 恋愛進展崩壊尺度の因子分析結果と因子間相関【研究2】

フェイズ		1	2	3
1	1 相手のすべてが良くなくて欠点は見えない	0.072	-0.026	0.793
	2 相手の欠点もチャームポイントの一つであり愛おしい	-0.053	0.556	0.325
	3 相手には欠点もあるが、そんな欠点は全く問題ではない	-0.168	0.566	0.317
2	1 相手には欠点もあるが、他にもいい点がたくさんあるので許してあげる	0.035	0.811	-0.050
	2 相手の欠点が目につくことがあるが、許してあげなくちゃと思う	0.307	0.580	0.006
	3 相手には欠点があるが人間誰にでも欠点があるので、それはしょうがない	-0.062	0.797	-0.211
3	1 つきあいを続けていくためには相手の欠点を何とかしてもらいたい	0.683	0.145	-0.200
	2 相手の欠点が目についてイライラさせられることが多い	0.849	-0.003	-0.078
	3 相手の欠点についてどうにかしろと注文をつけることが多い	0.759	-0.008	0.090
4	1 昔は相手の欠点と思わなかったことが、いまでは欠点だと思うようになった。	0.752	-0.003	0.109
	2 相手のちょっとしたしぐさや行動にイライラすることがある	0.775	0.046	-0.096
	3 普通なら欠点と思えないことまで、相手の欠点に思えてしまうことがある。	0.768	-0.135	0.253
因子間相関		1	-0.005	-0.103
		2		0.306
		3		

Table 6 各フェイズ尺度ごとの平均、標準偏差

	平均値	標準偏差	α 係数
フェイズ 1	11.75	3.50	0.692
フェイズ 2	13.58	3.50	0.747
フェイズ 3	10.50	3.86	0.817
フェイズ 4	10.19	3.83	0.802

(2) 相関の分析

それぞれの尺度間と愛情、友情尺度の間のピアソンの相関係数を Table 7 に示した。【研究1】と同様、フェイズ 1 尺度とフェイズ 2 尺度、フェ

イズ 3 尺度とフェイズ 4 尺度は高い相関があり、それ以外の組み合わせでは、相関は相対的に低かった。これは、第 1、第 2 フェイズと第 3、第 4 尺度が同じクラスターを形成していることを示

Table 7 各フェイズ尺度の得点と愛情・友情尺度の相関

	フェイズ				愛 情	友 情
	1	2	3	4		
フェイズ 1	1	.477**	-.127**	-.066*	.496**	.318**
フェイズ 2		1	.129**	.101**	.404**	.514**
フェイズ 3			1	.792**	-.019	-.139**
フェイズ 4				1	-.028	-.203**
愛 情					1	.691**
友 情						1

している。前者は恋愛進展フェイズ、後者は恋愛崩壊フェイズを大まかに示していると思われる。また、第1フェイズ尺度と第2フェイズ尺度は、愛情、友情尺度との正の相関が見られ、第3フェイズ尺度と第4フェイズ尺度は、友情尺度と負の相関が見られた。

調査参加者には、交際に関しての「現在の幸せ度」と「相手がどのくらい幸せを感じているか」

について7段階で評定させてある。これらの評定値と各尺度の相関係数を Table 8 にあげた。その結果、フェイズ 1, 2 尺度は幸せ度評定値、相手の幸せ度評定値と有意な正の相関、フェイズ 3, 4 尺度は有意な負の相関を示した。結果を Table 8 にあげる。

また、【研究2】では、交際相手との間の関係性について、「用もないのに電話をする」、「二人でお酒を飲みに行く」など19種類の関係性について、そのような行動が二人の間にあるかないかについて回答させた。それぞれの行動を「ある」としたものの割合を Table 9 に示す。また、この行動指標と各フェイズ尺度の相関係数を Table 10 に示した。フェイズ 2 尺度の得点についてほとんどの行動と1%水準で有意な正の相関が見られた。一方でフェイズ 4 尺度の得点とは、「二人で

Table 8 各フェイズ尺度の得点と幸せ度の相関

	幸せ度	相手の幸せ度推定
フェイズ 1	.329**	.172**
フェイズ 2	.311**	.228**
フェイズ 3	-.263**	-.086**
フェイズ 4	-.272**	-.140**

(** $p<.01$)

Table 9 交際行動と経験比率 (%)

交際行動	経験率
用もないのに電話する	34.6
用もないのに LINE する	50.4
悩み事を相談する	45.9
プレゼント	56.3
二人きりでデート	77.7
二人でお酒を飲みに行く	38.9
日帰り旅行	49.4
家族に話す	34.7
時々言い争う	29.6
相手の家に泊まる	35.1
相手を家に泊める	30.3
友人に紹介する	34.9
だいたいいつも一緒にいる	27.5
泊まりがけの旅行に行く	42.3
家族に紹介	25.4
別れ話をする	20.5
結婚話をする	36.3
結婚を真剣に考える	22.5
婚約する	7.3

Table 10 フェイズ得点と行動の相関

行 動	フェイズ			
	1	2	3	4
用もないのに電話する	0.075	0.131	0.044	0.032
用もないのに LINE する	0.038	0.151	0.011	-0.035
悩み事を相談する	0.076	0.186	-0.059	-0.109
プレゼント	0.060	0.204	-0.079	-0.141
二人きりでデート	0.055	0.216	-0.063	-0.120
二人でお酒を飲みに行く	-0.011	0.094	-0.026	-0.053
日帰り旅行	0.025	0.148	-0.012	-0.074
家族に話す	0.108	0.204	-0.055	0.113
時々言い争う	-0.104	0.131	0.195	0.115
相手の家に泊まる	0.033	0.096	0.000	-0.031
相手を家に泊める	0.071	0.113	-0.001	-0.019
友人に紹介する	0.050	0.191	0.003	-0.068
だいたいいつも一緒にいる	0.097	0.123	0.079	0.025
泊まりがけの旅行に行く	-0.007	0.194	-0.018	-0.064
家族に紹介	0.061	0.147	-0.017	-0.074
別れ話をする	-0.155	0.098	0.172	0.099
結婚話をする	0.045	0.206	0.002	-0.063
結婚を真剣に考える	0.145	0.192	0.036	-0.075
婚約する	0.019	0.042	-0.029	-0.062

(網かけ部分は無相関検定で $p<.05$)

言い争いをする」「家族に話す」など4項目をのぞけばすべて負の相関が見られた。つまり、フェイズ2尺度は、おもに関係性を深める行動と関連する心性を測定し、フェイズ4は、おもに関係性を低下させる行動と関連する心性を測定しているということである。

(3) カテゴリーごとの分析（素点によるカテゴリー分け）

前節の分析は各フェイズ尺度ごとに行われたが、【研究1】と同様に、素点を用いて各実験参加者をフェイズに分類した。その結果、フェイズ1は133名(13.3%)、フェイズ2は481名(48.1%)、フェイズ3は141名(14.1%)、フェイズ4は245名(24.5%)となった。【研究1】と同様、フェイズ2に分類されるものの比率が多かった。これは、ほかのフェイズに比べてフェイズ2の平均得点が高かったためである。

各フェイズに分類された参加者ごとに愛情尺度、友情尺度を集計した結果をTable 11に示す。分散分析の結果、愛情尺度 $[F(3,996)=31.85, p<.01]$ 、友情尺度 $[F(3,996)=98.65, p<.01]$ ともフェイズの主効果が有意となった。多重比較の結果、愛情尺度では、フェイズ1とフェイズ2の間とフェイズ3とフェイズ4の間で有意差が検出されなかったが、他の全ての差で有意な差が検出された。また、友情尺度では、フェイズ1とフェイズ2の間のみ有意差が検出されず、他の全ての組み合わせで有意な差が検出された。基本的には、愛情、友情ともに、恋愛進展フェイズであるフェイズ1,2が崩壊フェイズである3,4より高くなったということであり、本尺度の妥当性を示す結果だと思われる。

各フェイズに分類された参加者ごとに7段階で

評定させた恋愛関係における「幸せ度」と「交際相手の幸せ度」の推定値を集計した結果をTable 12に示す。分散分析の結果、幸せ度 $[F(3,996)=52.91, p<.01]$ 、相手の幸せ度推定値 $[F(3,996)=23.08, p<.01]$ ともフェイズの主効果が有意となった。多重比較の結果、愛情尺度では、フェイズ3とフェイズ4の間で有意差が検出されなかったが、他の全ての差で有意な差が検出された。また、交際相手の幸せ度評定値は、フェイズ1とフェイズ2、フェイズ3とフェイズ4の間に有意差が検出されなかったが、他の全ての組み合わせで有意な差が検出された。これも基本的には、幸せ度が、恋愛進展フェイズであるフェイズ1,2が崩壊フェイズである3,4より高くなったということであり、本尺度の妥当性を示す結果だと思われる。

Table 13には素点をもとにしたカテゴリー分類ごとにカップルがどのような行動をとっているかの頻度をまとめたものをあげた。「相手を家に泊める」、「婚約する」以外のすべての項目でフェイズ間で有意な差が検出された。これらのもののうち、「悩み事を相談する」、「プレゼント」など関係性を深める項目の多くは、フェイズ1,2で経験率が高く、フェイズ3,4で経験率が低いという方向のものであった。また、「時々言い争う」、「別れ話」をするなど関係性を低める項目については、フェイズ1,2で低く、フェイズ3で高くなっていた（そして、フェイズ4では低下していた。これは恋愛崩壊が進行すると相互作用自体の頻度が少なくなるからだと思われる）。この結果も全体的に見ると本尺度の妥当性を示しているものと考えて良いと思われる。

Table 11 フェイズごとの愛情、友情尺度の推移

	愛情尺度	友情尺度
フェイズ1	43.11 (12.18)	27.86 (7.33)
フェイズ2	41.42 (10.22)	29.12 (5.11)
フェイズ3	34.17 (9.96)	23.55 (6.56)
フェイズ4	35.95 (10.40)	21.80 (5.94)

Table 12 フェイズごとの幸せ度、相手の幸せ度推定値

	幸せ度	相手の幸せ度推定
フェイズ1	5.76 (1.13)	5.38 (1.17)
フェイズ2	5.45 (1.13)	5.21 (1.07)
フェイズ3	4.63 (1.22)	4.89 (1.09)
フェイズ4	4.56 (1.21)	4.58 (1.12)

Table 13 素点ベースのフェイズ分けごとの行動経験値

	フェイズ				χ^2
	1	2	3	4	
用もないのに電話する	40.6	37.4	33.3	26.5	*
用もないのに LINE する	57.9	57.2	46.8	35.1	**
悩み事を相談する	51.9	54.3	39.7	29.8	**
プレゼント	60.2	67.4	47.5	37.6	**
二人きりでデート	83.5	86.9	71.6	58.4	**
二人でお酒を飲みに行く	36.8	43.5	36.3	32.7	*
日帰り旅行	54.9	55.5	55.3	31.0	**
家族に話す	42.1	41.8	29.1	20.0	**
時々言い争う	18.8	31.2	41.1	25.7	**
相手の家に泊まる	40.6	37.8	34.0	27.2	*
相手を家に泊める	33.8	31.2	29.8	26.9	n.s.
友人に紹介する	40.6	41.8	30.5	20.8	**
だいたいいつも一緒にいる	33.8	27.4	31.9	21.6	*
泊まりがけの旅行に行く	41.4	50.7	41.1	26.9	**
家族に紹介	27.8	29.7	24.1	16.3	**
別れ話をする	11.3	21.4	34.8	15.5	**
結婚話をする	40.6	43.7	36.2	19.6	**
結婚を真剣に考える	31.6	26.6	20.6	10.6	**
婚約する	10.5	8.1	7.8	3.7	n.s.

(4) カテゴリーごとの分析（標準化得点によるカテゴリー分け）

ここまでの分析では、フェイズ2の参加者が全体の半数程度と大きくなってしまった。これは、Table 6 に示されたとおり、各フェイズごとの尺度の中で、フェイズ2尺度の平均点が最も大きいことから生じていた。このバイアスを補正する一つの方法は、参加者が恋愛進展崩壊のどのフェイズにいるのかを判断する場合に、各フェイズ尺度の素点を使うのではなく、尺度内で標準化した標準得点を使用し、その得点のもっとも大きなものをその参加者の現在のフェイズとする方法である。そこで、次にこの方法によって各参加者をカテゴリー分けした結果について分析する。

この方法による、フェイズ分けの結果、フェイズ1は200名（20.0%）、フェイズ2は245名（24.5%）、フェイズ3は187名（18.7%）、フェイズ4は368名（36.8%）となった。予想通り、フェイズ2の参加者が大きく減った。素点によって参加者のフェイズをカテゴリーした場合のカテ

ゴリーと、標準得点によって参加者のフェイズをカテゴリー分けした場合の違いについてクロス集計した結果を Table 14 にあげた。素点カテゴリーの1, 3, 4のほとんどは、標準化カテゴリーでも同様のカテゴリー分類がなされたが、素点カテゴリーにおいてフェイズ2と分類された参加者は、標準化カテゴリーでは、1~4にある程度分散して分類された。

Table 14 素点によるカテゴリー化と標準得点によるカテゴリー化の違い

		標準化得点による カテゴリー化				合計
		1	2	3	4	
素点による カテゴリー化	1	114	0	3	16	133
	2	86	245	43	107	481
	3	0	0	141	0	141
	4	0	0	0	245	245
	合計	200	245	187	368	1,000

(3)の分析と同様に各フェイズごとの愛情、友情尺度と幸せ度について集計し、Table 15とTable 16にあげた。分散分析の結果、愛情尺度 [F (3,996)=31.25, $p<.01$], 友情尺度 [F (3,996)=110.45, $p<.01$], 幸せ度 [F (3,996)=65.02, $p<.01$],

Table 15 各フェイズごとの愛情、友情尺度の平均得点と標準偏差

	愛情尺度	友情尺度
フェイズ 1	44.08 (11.16)	29.53 (6.13)
フェイズ 2	41.69 (10.38)	30.44 (3.98)
フェイズ 3	36.15 (10.72)	24.50 (6.52)
フェイズ 4	36.66 (10.15)	22.92 (6.19)

Table 16 フェイズごとの幸せ度、相手の幸せ度推定値

	幸せ度	相手の幸せ度推定
フェイズ 1	5.82 (1.06)	5.43 (1.05)
フェイズ 2	5.64 (1.04)	5.36 (1.02)
フェイズ 3	4.74 (1.20)	4.92 (1.12)
フェイズ 4	4.70 (1.23)	4.65 (1.12)

相手の幸せ度推定値 [F (3,996)=32.23, $p<.01$] となり、すべての項目について、フェイズの主効果が認められた。また、素点によってカテゴリー分けしたときにくらべ、フェイズ 1, 2 とフェイズ 3, 4 の間の差はより顕著になった。また、各フェイズと行動の関連についてを Table 17 にあげたが、これに関しても総合的に見て、やはり素点による分類がより明確になる形となった。これらのことから、フェイズ分類は素点によるものよりも標準化得点によるもののほうがより妥当性の高いものになることが示された。ただし、フェイズ 1 と 2 の間、フェイズ 3 と 4 の間についてはこれらの分析で明確な分離はできなかった。

(5) 標準得点によるカテゴリー分類を簡便法によって行う方法

さて、(4)では、標準得点によるカテゴリーわけがより適切であると述べたが、実際に個々人のデータから、これを算出するには、標準化の手続きが必要であり、若干面倒である。それぞれのフェイズ尺度の標準偏差は比較的類似しているこ

Table 17 標準得点ベースのフェイズ分けごとの行動経験値

	フェイズ				χ^2
	1	2	3	4	
用もないのに電話する	38.5	39.6	36.4	28.3	*
用もないのに LINE する	61.0	59.2	49.7	39.1	**
悩み事を相談する	54.5	61.2	43.3	32.3	**
プレゼント	65.0	72.2	52.4	42.9	**
二人きりでデート	87.0	91.0	75.9	63.6	**
二人でお酒を飲みに行く	39.5	47.8	38.5	32.9	**
日帰り旅行	55.0	60.4	55.1	36.1	**
家族に話す	46.5	46.1	33.2	21.5	**
時々言い争う	22.5	34.3	39.6	25.3	**
相手の家に泊まる	39.5	39.6	36.4	29.1	*
相手を家に泊める	34.0	35.9	29.9	24.7	*
友人に紹介する	42.0	28.2	34.2	22.6	**
だいたいいつも一緒にいる	36.0	28.6	31.6	20.1	**
泊まりがけの旅行に行く	44.5	56.3	44.4	30.7	**
家族に紹介	31.0	33.9	26.2	16.3	**
別れ話をする	12.0	25.7	32.6	15.5	**
結婚話をする	44.0	48.2	39.6	22.6	**
結婚を真剣に考える	33.5	30.6	20.9	12.0	**
婚約する	10.0	10.2	8.6	3.3	**

とから、平均値のみ調整すれば、特別の計算を行わなくても、標準得点によるカテゴリー分けが模擬できると考えられる。そこで、フェイズ尺度1得点から1点を、フェイズ2尺度から2点を引いたものとフェイズ3,4尺度の得点を比較し、もっとも数字の大きかったものをその参加者の恋愛進展崩壊フェイズとして簡便に計算する補正方法を考案した。この方法でカテゴリー分けしたものと標準得点を計算してカテゴリー分けしたものの度数をクロス集計したものを Table 18 にあげる。その結果、簡便法は90%~100%, 標準得点によるカテゴリー分けを再現することができることがわかった。つまり、この簡便法がそれなりに有効であることが示された。

Table 18 標準化によるカテゴリー分けと簡便法によるカテゴリー分けの関連

		標準化得点による カテゴリー化				合計
		1	2	3	4	
カテゴリー化 簡便法による	1	156	0	0	0	156
	2	36	245	9	29	319
	3	7	0	178	0	185
	4	1	0	0	339	340
	合計	200	245	187	368	1,000

考 察

【研究2】では、【研究1】で作成した恋愛進展崩壊尺度についてより多くの実験参加者のデータを用いて分析を行った。その結果、この尺度はおおむね妥当性のあるものだということが確認された。ただし、恋愛進展過程を測定するフェイズ1, 2と恋愛崩壊過程を測定するフェイズ3, 4は明確に分離するものの、フェイズ1と2の間、フェイズ3と4の間にはそれほど明確な差異は見られなかった。また、恋愛進展、崩壊フェイズの判断においては素点による分類よりも、各フェイズ尺度ごとの標準化得点を用いたものの方がより妥当性があるということが示された。

4. 【研究3】恋愛進展崩壊フェイズとデートバイオレンス・ハラスメントの関連

目 的

【研究1, 2】で、恋愛進展崩壊尺度が構成されたので、【研究3】では恋愛の進展と崩壊の程度とデートバイオレンス・ハラスメントがどのように関連しているのかについて検討する。恋愛の進展に伴うデートバイオレンスの発生については、いくつかの説がある。

ひとつは、交際初期においては、デートバイオレンス・ハラスメントはあまり発生せず、関係が進展していくにしたがってこれらの行為が発生していくというものである。一方で、交際が進展して行くに従ってデートバイオレンス・ハラスメントの発生頻度は減少していくという考えもある。これは、関係性が進展して行くに従って実際にバイオレンス・ハラスメントが減少するという可能性もあるが、たんに、バイオレンスやハラスメントが発生した場合、カップルは別れることを選択する可能性が高いので、結果的にバイオレンスやハラスメントの被害に遭っているカップルが減るという考えである。第3に恋愛の進展とデートバイオレンス・ハラスメントの頻度はあまり変わらないという可能性もある。これは交際初期からこのような行為が発生し、それがとくに別れる確率を増加させないまま関係が継続していくのをもっともありふれた状態にあるという考えなどに基づくものである。

このようにさまざまな考えがあるにもかかわらず、実際にどのパターンが生じるのかについてはわかっていないのが現状である。そのひとつの理由はそもそも「関係の進展」というものをとらえる指標がなかったからである。従来の研究では、関係の進展の代わりに交際期間などが用いられることが多かったが、交際期間を用いた場合、交際期間とデートバイオレンス・ハラスメント間には相関は生じない (Table 19)。しかし、交際期間

Table 19 交際月齢とバイオレンス・ハラスメント尺度との相関

DV 種別	交際月齢との相関
身体的暴力	0.008
間接的暴力	0.055
支配監視	0.014
言語的暴力	0.000
性的暴力	0.038
経済的暴力	0.056
つきまとい	0.026

が関係性の進展の指標として使用できるのかといういくつかの問題点もある。実際、本研究においても交際月齢がフェイズごとに異なるのかを検定したところ、素点のデータによるカテゴリー分けで $[F(3,996)=0.708, n.s.]$ 、標準得点によるカテゴリー分けで $[F(3,996)=1.196, n.s.]$ となっており、関連性はみられていない。短い期間で崩壊フェイズに入るカップルと長い期間、恋愛進展プロセスに居続けるカップルがいるということである。そこで、本研究では、恋愛進展崩壊プロセスの段階とデートバイオレンス・ハラスメントの程度の関連について検討してみたいと思う。

方 法

研究参加者：異性と交際中である大学生男女 1,000 名（男性 500 名、女性 500 名）

手続き：本研究は、【研究 2】と同時に行われた。研究参加者も【研究 2】とおなじである。ウェブ調査で、恋愛進展崩壊尺度と改訂版デートバイオレンス・ハラスメント尺度（越智・喜入・甲斐・佐山・長沼, 2015b）を実施した。改訂版デートバイオレンス・ハラスメント尺度は、身体的暴力、間接的暴力、支配・監視、言語的暴力、経済的暴力、性的暴力、つきまといの 7 種類のバイオレンス・ハラスメント項目についてそれぞれ「まったくない (1)」～「よくある (5)」までの 5 段階でその頻度を報告させるものである。

結 果

まず、恋愛進展崩壊尺度の 4 種類の項目と、デートバイオレンス・ハラスメント尺度の項目の相関について分析を行った。分析結果を Table 20 に示した。

つぎに、恋愛進展崩壊尺度への回答を元に研究参加者の現在の関係性についてフェイズに振り分けた。振り分け方については素点による分類と標準得点による分類が考えられるが、【研究 2】の結果に基づいて、本研究においては標準得点による分類を使用することにした。各フェイズカテゴリーごとのデートバイオレンス・ハラスメント下位尺度の平均得点について Table 21 に示す。

Table 20 恋愛進展崩壊フェイズ尺度とデートバイオレンス・ハラスメント尺度の相関

	フェイズ			
	1	2	3	4
身体的暴力	-0.046	-0.167	0.223	0.258
間接的暴力	-0.094	-0.129	0.227	0.228
支配監視	-0.098	-0.097	0.258	0.272
言語的暴力	-0.122	-0.098	0.232	0.247
性的暴力	-0.082	-0.146	0.183	0.242
経済的暴力	-0.107	-0.120	0.202	0.212
つきまとい	-0.060	-0.205	0.200	0.269

イタリック以外のものはすべて $p<.01$

Table 21 恋愛進展崩壊フェイズとデートバイオレンス・ハラスメントの関連

標準化 フェイズ	フェイズ				有意差
	1	2	3	4	
身体的暴力	5.69	5.40	7.36	8.10	**
間接的暴力	5.88	6.01	7.89	7.96	**
支配監視	6.39	6.61	8.50	8.68	**
言語的暴力	6.06	6.52	8.16	8.55	**
性的暴力	5.98	5.98	7.35	8.07	**
経済的暴力	5.70	6.17	7.58	8.01	**
つきまとい	5.60	5.37	7.12	8.08	**

** $p<.01$

考 察

本研究の結果、恋愛フェイズが進行するに従って、デートバイオレンス・ハラスメントはすべての類型において増加していくということが示された。とくに、進展過程と崩壊過程が折り返すフェイズ2とフェイズ3の間において大きな増加が見られた。各フェイズごとの尺度得点とデートバイオレンス・ハラスメントの関係を見ても進展フェイズでは一貫して負の相関が見られ、崩壊フェイズでは正の相関が見られた。これらの結果は、恋愛関係が進展していく過程においては、デートバイオレンス・ハラスメントは発生しないものの、崩壊フェイズに入ると全ての種類のデートバイオレンス・ハラスメントが増加してくるということを示している。

ただし、現実問題として同じ行為が行われていても恋愛進展フェイズではバイオレンスやハラスメントと認知されないのに対して、恋愛崩壊フェイズではそれをバイオレンス・ハラスメントとして認知するようになるという可能性はある。さらに、本研究結果を解釈する上で留意しなければならないのは、本研究で用いられたのは、一時点の横断的データであり、カップルを縦断的に追跡したわけではないので、個々のカップルの恋愛の進展が本当にフェイズ1→2→3→4と変化していくのかについては明確でないということである。この点については引き続いてカップルの縦断的追跡調査を行っていく必要があるだろう。

文 献

- 赤澤淳子. (2016). 国内におけるデートDV研究のレビューと今後の課題. 福山大学経済学論集, 40 (1), 31-83.
- Duck, S. (1982). A topography of relationship disengagement and dissolution. *Personal relationships*, 4, 1-30.
- Jennings, W. G., Okeem, C., Piquero, A. R., Sellers, C.

S., Theobald, D., & Farrington, D. P. (2017). Dating and intimate partner violence among young persons ages 15-30: Evidence from a systematic review. *Aggression and violent behavior*, 33, 107-125.

Levinger, G. (1980). Toward the analysis of close relationships. *Journal of experimental social psychology*, 16 (6), 510-544.

松井豊. (1993). 恋愛行動の段階と恋愛意識. 心理学研究, 64 (5), 335-342.

越智啓太 (2015). 恋愛の科学 実務教育出版

越智啓太, 喜入暁, 甲斐恵利奈, 佐山七生, 長沼里美 (2015). 改訂版デートバイオレンス・ハラスメント尺度の作成と分析 (1) — 被害に焦点を当てた分析 — 法政大学文学部紀要, 71, 135-147.

越智啓太, 喜入暁, 甲斐恵利奈, 佐山七生, 長沼里美 (2016a). 改訂版デートバイオレンス・ハラスメント尺度の作成と分析 (2) — 加害に焦点を当てた分析 — 法政大学文学部紀要, 72, 161-171.

越智啓太, 甲斐恵利奈, 喜入暁, 長沼里美 (2016b). 改訂版デートバイオレンス・ハラスメント尺度の作成と分析 (3) — 恋愛行動パターンとDVの関連 — 法政大学文学部紀要, 73, 109-126.

Rubin, Z. (1970). Measurement of romantic love. *Journal of personality and social psychology*, 16 (2), 265-273.

Sternberg, R. J. (1986). A triangular theory of love. *Psychological review*, 93 (2), 119-135.

高坂康雅. (2014). 大学生の恋愛行動の進展. 和光大学現代人間学部紀要=Bulletin of the Faculty of Human Studies, 7, 215-228.

Vangelisti, A. L. (2006). Relationship Dissolution: Antecedents, Processes, and Consequences. In P. Noller & J. A. Feeney (Eds.), *Close relationships: Functions, forms and processes* (pp. 353-374). Hove, England: Psychology Press/Taylor & Francis.

注 釈

- (1) 本研究は日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究C)の助成を受けて行われた。
- (2) 本論文の作成に当たっては、新潟陽光氏(中央大学理工学部)の協力を得た。

APPENDIX 恋愛進展崩壊フェイズ尺度の項目

フェイズ1尺度

相手のすべてがいておしくて欠点は見えない
相手の欠点もチャームポイントの一つであり愛おしい
相手には欠点もあるが、そんな欠点は全く問題ではない

フェイズ2尺度

相手には欠点もあるが、他にもいい点がたくさんあるので許してあげる
相手の欠点が目につくことがあるが、許してあげなくちゃと思う
相手には欠点があるが人間誰にでも欠点があるので、それはしょうがない

フェイズ3尺度

つきあいを続けていくためには相手の欠点を何とかしてもらいたい
相手の欠点が目についてイライラさせられることが多い
相手の欠点についてどうにかしろと注文をつけることが多い

フェイズ4尺度

昔は相手の欠点と思わなかったことが、いまでは欠点だと思うようになった。
相手のちょっとしたしぐさや行動にイライラすることがある
普通なら欠点と思えないことまで、相手の欠点に思えてしまうことがある。

*「非常によくあてはまる (7)」～「まったくあてはまらない (1)」で7段階評定

*各フェイズ得点を合計し、フェイズ2尺度得点から2、フェイズ1尺度得点から1を引いたあと、最も得点の高いのが回答者の恋愛進展・崩壊フェイズである（簡便法）

The Relationship Between The Process of Love and Dating Violence
Development and Analysis of the Revised Version of
the Dating Violence/Harassment Scale (6)

Keita OCHI

Abstract

This study investigated the relationship between the process of love development/collapse and dating violence/harassment. First, dating phase scale with some degree of reliability and validity was constructed to measure how the couple has the love relationship now. Next the correlation between the scores on this scale and the revised version of the dating violence/harassment scale was calculated. The results showed that love development phase does not lead to dating violence/harassment, but collapse phase leads to these phenomena.

Keywords : romantic relationship; love; collapse of love; love development; dating harassment